

令和の大学生と読む昭和のマンガ(2)

An Attempt to Read Showa Era Manga with Students in the Reiwa Period(2)

村 松 純 光

はじめに

昨年度私はこの場で担当科目「現代コミュニケーション論」における授業実践について「令和の大学生と読む昭和のマンガ(1)」と題した小報告をおこなった。本稿はその続編であり、授業の構想段階までを書いて中座していた旧稿（以降「(1)」とする）の不足を補おうとするものである。全4章から成る「(1)」では前半の1、2章で「現代コミュニケーション論」とはそもそも何であり何をどう講じることが可能かという科目の原点について書き、後半の3、4章で使用教材の選定方針とその配置等について書いた。つまりはそうした開講前夜までのドキュメンタリーが「(1)」、個々の教材の詳細や授業展開上の工夫、学生の反応等の授業の実際に関するものが本稿という整理である。

初等・中等教育の世界では授業者が「学習指導案」と呼ばれる授業計画書を（理想としては毎時）書く習わしがある。授業の目的や目標、学習者集団の学力レベルや日頃の授業時の様子、「教材観」と呼ばれる使用教材に対する授業者の理解や問題意識、分単位で刻んだ授業展開案、個々の学習メニューについて学習者が示すであろう反応の予測とそれへの対応策等、なかなか盛り沢山の内容の書類である。私も高校に籍のあった時分は研究授業や公開授業のたびによく書いた。その短期大学版が「(1)」と整理してもいい。ただ「(1)」は科目「現代コミュニケーション論」の由来（初等・中等教育では『学習指導要領』が担っている領域である）から開講前夜までを書いて一応の完結をみているが、「教材観」等、本稿に譲るつもりで敢えて書き漏らした項目がある。この先授業の実際について綴る中でそれらも補っていくつもりである。

「現代コミュニケーション論」は昨年度いわゆるA・B科目としてほぼ同一内容の講義を春学期と秋学期で二回通り実施したが、今年度は春のみの開講となり受講者数が大きく減少した。そもそも昨年度の通年開講がイレギュラーで現行の半期開講が例年の形態とは言え、担当としては寂しい限りである。というのも、毎時学生を書く授業レビューが本講座の支柱であり、授業内での活用はもちろん、これの蓄積がシラバスの微調整や更新に大きく関わっているからである。春の借りを秋にほんの一部でも返済することのできた昨年度の環境は授業者にはまこと有難いものであった。今年度はそれが来年春まで叶わないが、本稿の執筆によってその間隙を多少なりと埋められたらと考えている。

第1章 授業の型

(1)「昭和のマンガ」教材化の意図

「(1)」の第2章-(2)で私はこの科目を「現代社会におけるコミュニケーションの諸問題について皆で議論する授業」と規定した。そして毎時テーマを変えての議論がしやすいよう、主たる教材には読み切り型の短編マンガを充てることにした。受講生に馴染みのある令和の今の作品ではなく敢えて昭和期の作品から多くを採ったのは、この科目で言う「現代」が昭和に端を発しており、今と地続きであることを強く意識させたかったからである。令和の大学生が「現代」と向き合い、同時代人でありながら世代ごとで異なる価値観、あるいは世代を超えて共有されている価値観について考える。そのための教材として、長い「現代」（背景には当然国民の長寿化もある）を貫いて存在し続ける「昭和のマンガ」は絶好の媒体と言えるであろう。たとえば「現代社会におけるコミュニケーションの諸問題」の主要テーマ「異世代間ギャップ」「世代間交流のあり方」について考える時、昭和マンガの中にその時代特有の空気と今に通じる空気の両方を見出すことができた体験は、やがて異世代理解を促す「経験」となり、世代間交流を進める原動力となるに違いない。

(2)使用教材

「(1)」の第3章-(3)にて、本授業で教材とした「昭和のマンガ」9作品について、作者名・作品名（エピソード名）・初出情報・授業時に設定したテーマを順に挙げた。以下に作者名・作品名・発表年（初出掲載年）のみを使用順に再掲する。なお、授業時に用いたテキストの出典（全て初出と異なる）については注にまとめて示した。昭和の時代から今まで長く読み継がれている「現役」作品であることを示すためテキストはなるべく現在も手に入る文庫や、時にはいわゆるコンビニ本などの廉価版からも採り、学生にもなるべく現物にあたることを求めている。（※1）

- ①藤子・F・不二雄（※2）『ミノタウロスの皿』（1969〈昭和44〉年）
- ②あすなひろし『青い空を、白い雲がかけてった』より「いつか見た遠い空」（1977〈昭和52〉年）
- ③手塚治虫『ブラックジャック』より「ハッスルピノコ」（1976〈昭和51〉年）
- ④諸星大二郎『無面目』（1988〈昭和63〉年～1989〈平成1〉年）
- ⑤藤子不二雄A（※3）『明日は日曜日そしてまた明後日も…』（1971〈昭和46〉年）
- ⑥永島慎二『仮面』（1967〈昭和42〉年）
- ⑦つげ義春『チーコ』（1966〈昭和41〉年）
- ⑧高野文子『田辺のつる』（1980〈昭和55〉年）
- ⑨辰巳ヨシヒロ『東京うばすて山』（1971〈昭和45〉年）

上記のうち②③は長編作品の1エピソードであり独立した短編作品ではないが、いずれも一話完結型（読み切り型）の長期連載作品が典拠である。広義の短編作品と捉えて教材に選んだ。また④は短編と言うには苦しい170ページほどの長さの作品であるが、『莊子』の「混沌」のエピソード（現代のショート・ショートに通じる「オチ」を持った掌編である）に拠っており、物語構造の分

かりやすさから教材向きであると判断し、使用を決めた。

(3)ルーティーン

「(1)」の第3章-(2)で概要を書いたが、本科目で毎時おこなっているルーティーン・ワークを展開順に詳述したものが下の㉗～㉙である。それぞれの概ねの配当時間も()内に示した。

㉗「ふりかえりシート」の返却(5分※)※授業時間外(始業前)

授業開始5分前から、学生が前時に提出した「ふりかえりシート」(㉘を参照)の返却を呼名の上でおこなう。全てのシートに必ず一定量のコメントを書いて返却しているため、それを読んで友人とすぐに共有する者、一人ほくそ笑む者、あまり関心のなさそうな者等、いろいろである。このタイミングでの返却は、遅刻者、欠席者の正確な把握のためだけでなく、この後のワークにスムーズに移行するためにも有効だと考えている。

㉘アイスブレイク(5分)

本科目が現代コミュニケーション学科における学びの基礎力を培う「基本科目」(全3科目)の一つであることから、カリキュラムポリシーでも初年次での履修が推奨されている。そのため春学期の月曜3限のこの科目から一週間をスタートさせるという一年生は多い。そこで、緊張感に適度な揺さぶりをかける試みとして「コミュニケーション席替え」を実施している。毎時異なった相手とペアで座り(初めから全席指定の場合、コミュニケーションゲームを通じてその場で決まる場合等、いろいろである)、授業内でおこなう共同ワークを通じて交友の幅が徐々に広がっていく。日頃なかなか話す機会がなかった人と話せて面白かった、新鮮だった、ドキドキしたといったコメントを「ふりかえりシート」に書いてくる学生は多い。後ろ向き、批判的なコメントは今のところ見られない。

㉙前時のふりかえり(25分)

前時に読んだマンガ等の作品の内容を同じスライドを用いて「思い出す」ところから始める。スライドを見る前にペアで対話をさせ、どんな話であったか一緒に思い出す作業を加えることもある。続けて前時の終わりに学生が書いて提出した「ふりかえりシート」を全受講生の2割分ほど紹介する。学生の直筆をスキャンしたものをそのまま映写し、適宜コメントを差し挟みながら読み上げていく。取りあげた学生の名は控えてあり、全15回の講義を通じてなるべく受講生全員のものを拾えるように配慮している。このふりかえり作業が本講義の肝であり、その日のテーマは必ず前回の学びの中にあった何がしかと紐づいているため、学生の書いたシートの中に今日これから読む作品の世界に繋がるワードが潜んでいる。それを拾って紹介すれば、そのまま本時の導入になる。

④本時の学習（45分）

マンガ等の作品を皆で同時に視聴し、その後ディスカッションをおこなう。作品の共有はスライドの映写によっておこない、教員が適宜ナレーションや台詞を読み上げたり、情報を補ったりする。あらかじめテキストを示して読書課題としたり、授業内に時間を設けて個々に読ませる方法もあるが、今やスマホ以外ではマンガを読めない（ページ単位だとコマの読み進め方がわからない）学生もいるため、教員のガイドのもとゆっくり丁寧に読み進めていくのが作品共有の一番の近道なのである（蛇足ながら感慨を綴れば、令和の現役18歳たちが画面上の昭和マンガをくいいるように見つめ、昭和最後の年の18歳がその光景を「マンガ離れ」を憂いつつやはり見つめている、という図は、なかなか皮肉が効いていてマンガ的であると思う）。作品の共有を終えたら、あるいはその途中であっても、現代のコミュニケーションのあり方に関する発問を複数おこなう。ペアや前後席四人程度で話し合わせたり、何人かには直接マイクを向けて考えを言わせるなどして意見の共有化を図る。自身の考えが他者とのコミュニケーションや他者の発言をきっかけに揺らいだり、固まったり、深まったりする。そうした体験を数多く積ませることも、このワークの目的の一つである。

④「ふりかえりシート」記入（15分）

毎時配布するレジュメ（A4サイズ・片面印刷）の下三分の一ほどを学生のコメント欄「ふりかえりシート」とし、受講者は授業の終わりの10～15分ほどで書いて提出する決まりである。大学生らしい文字の大きさや分量を意識して書くよう言うと概ね300字程度でまとめてくる。欄外まではみ出して400字以上で出してくる者もいる。教員は全てをスキャンした後に一枚一枚朱を入れ、次の回の冒頭で返却している（⑦を参照）。全シートの中から、作品およびテーマの理解度が十分と感じられるもの、テーマに関連する事例を実体験や他メディアから適切に引いているもの、過去の授業で扱ったテーマや作品との関連性について適切に述べられているもの等を次の回で紹介（スキャン画像を映写）し、共有化を図っている。

第2章 授業実践の報告

(1)授業ガイダンス

前章－(2)で、本授業で活用した「昭和のマンガ」のリストを示した。このうち藤子・F・不二雄『ミノタウロスの皿』を用いた第1回の講義については、他に先立って「(1)」の第4章で解説をおこなっている。その稿で私は、このSF譚の主人公が言う「言葉は通じるのに話が通じないという……これは奇妙な恐ろしさだった」という台詞（※4）に注目して、章末を次のように結んだ。「(略) …価値観を異にする者同士のどこまでも平行線をたどる会話、『言葉は通じるのに話が通じない』イライラのその先にはもう暴力しかない、という展開は我々の『現実の社会』とまるで同じではないか。そこに受講生が思い至れば、次回第2回以降に読む作品も『現実の社会』に引き寄せて読むことができるだろう。本教材を第1回で用いる理由はここにある。」

初回授業は講座のガイダンスも兼ねている。ここで私が受講生に伝えたかったことは、今後授業で読んでいく作品はどれもこれも全てあなたがたの物語だ、ということである。このことを伝えるための教材として、今のところ『ミノタウロスの皿』以上の作品は見当たらない。

(2)実践報告

ここからは前記リストに沿って作品ごとの実践報告をおこないたい。本来であれば全作品を取り上げたいところであるが、紙数の関係から約半分の4作品を抽出（以下の【A】～【D】）し、授業の実際について4項目（㊦作品のあらまし、㊧授業の議題、㊨象徴的な台詞、㊩学生の反応に対する授業者の整理）からまとめることとした。

【A】あすなひろし『青い空を、白い雲がかけてった』より「いつか見た遠い空」

㊦中学3年生のツトムのクラスに、凌（リョウ）という名の女の子が転校してきた。明るくて華のある彼女は一瞬にしてクラスの人気者となるが、同時に一部からは疎まれる存在となる。ある日の学校帰り、ツトムから自由奔放な君が羨ましいと言われた凌は急に寂しげな表情を見せ、意外な返答を残して足早に立ち去った。病気で学校を休んだ凌の家を訪ねたツトムたちは彼女の複雑な境遇を初めて知るが、凌はその後学校に戻らないまま、また別の学校に転校して行ってしまう。

㊧他人を「羨む（心病む）」、他人が「羨ましい（心病ましい）」ってどんな感情？

㊨「ねえ……ツトムくん／あたしたち／家と学校を往復するだけでもたくさんの人たちとすれちがうわ／泣きながら歩いている人なんていないけど／だからといって／みんなが幸せな心で歩いているとは限らないのよね……」（ツトムに「君がうらやましいだけさ……」「みんなに好かれて／好きかってにふるまって」「……自由でさ！」と言われた際の凌の言葉）

㊩自分自身が人を羨んだ時の気持ちを振り返ったり、冷静な今の頭で分析したコメントが多かった。羨む対象がアーティストやトップアスリートなど飛び抜けた才能の持ち主である場合と、身近な友人などの場合とで「羨ましい」の意味合いが変わるということを書く者もいた。「『うらやましい』とは、自分にはないものを相手がもっているとき、自分ももっているけれど、相手のように上手に使いこなせないときに生まれる感情だと思った私は『うらやましい』を憧れの意味でとらえることが多かったけど、前回の授業で学んだ人それぞれの考え方、価値観が違うということから考えると、負の感情だととらえる人もいるんだと思った。」（原文ママ 以下学生のコメントは同じ）と、先に読んだ『ミノタウロスの皿』のテーマと絡めて書いてきた学生もあり、このように別の回で読んだ他作品との関連付けはこちらのねらいでもあるから、授業でも積極的に紹介している。回を重ねるにつれ、学生たちが自然と「関連付け」をおこなうようになっていくのがコメントを通じて確認できた。これは成果の一つに数えていいことと思う。

また、留学生が日本語の語彙力を高める場にもしたいと考え、彼ら彼女らのコメントも毎時紹介するようにしている。この回ではある留学生が次のように書いていた。「私たちは精一杯アルバイトしたり、就活をしたりすることで、のんびり。日本人は、ずっと日本に住めるから、のんびりで

きるという考え方が、とてもうらやましいです。」「のんびり」は豊かな、あるいはそこそこの生活ができる、というほどの意味であろうか。「うらやましい」の中には日本人に対する複雑な感情が見え隠れしているように思う。実際このコメントの数行前でこの学生は「頑張っていない日本人」という表現を使い、日本で出会ったあまり勤勉ではないタイプの日本人のことを批判的に書いている。「うらやましい」の感覚は人間の機能として万国共通ないしはニアリーイコールのものなのか。人や国によって、宗教や価値観によってだいぶ異なるものなのか。先に紹介した学生がこの話から『ミノタウロスの皿』を想起したのは、至極当然なことなのである。

あすなひろしというマイナーポエトを令和の大学生に（こそ）知ってもらいたい、という気持ちから用いた教材であったが、「うらやましい」という言葉が軸となったこの小品を『ミノタウロスの皿』の後に持ってきたのはいい判断であったと思う。「泣きながら歩いてる人なんていないけど／だからといって／みんなが幸せな心で歩いているとは限らないよね」という凌の言葉は、令和の大学生にも“刺さった”のではないか。この台詞を15歳の少女にしゃべらせた作者は相当な策士である。出典である『青い空を、白い雲がかけてった』は、人物同士のやりとりがいかに昭和の学園ドラマといった風情で、私など今読むとさすがに時代を感じる。かつて糸井重里が「真っ昼間の悲しさ」と表現したというあすなひろしの作品（※5）には、笑顔の裏に悲しみをたたえた凌のようなキャラクターが多数登場するが、こうした「顔で笑って心で泣いて」タイプのヒーロー・ヒロイン像に昭和の様式美を感じる向きもあるだろう。だが、学生の感想に「古くさい」とか「時代がかっている」といった記述は皆無であった。考えてみれば近年ヒットした映画やドラマには古典回帰的な、良くも悪くも大味な設定のものが多く思う。そうしたものに馴染んでいる令和の大学生に、あすな作品は案外アピールする所が多いかもしれない。大味に見せて実は繊細の極みなのがあすなひろしの魅力だと私は思っている。それが伝わるような授業を今後も構想していきたい。

【B】手塚治虫『ブラックジャック』より「ハッスルピノコ」

⑦姉の体内に20年近くいたピノコは通学経験がない。ひそかに高校に行きたいと思っていた彼女は通信教育に学ぶが、それは高校入学資格とは無関係のものであった。ブラックジャック（以下B. Jとする）は大金を積んで高校側に彼女の受験を認めさせるが、試験当日、ピノコは極度のストレスから会場で倒れてしまう。B. Jの手で一命を取り留めたピノコは、今度は幼稚園から始めると言う。だが、通ってみればトラブルばかり。最後は園からもう来なくていいと言われてしまう。

⑧人はどうして学校に行くの？「学びたい」と「学校に行きたい」はイコールなの？

⑨「あんまいちゅきじゃないよさ／れも学校はらーいちゅき」（B. Jに「おまえ勉強が好きなかい？」と問われた際のピノコの言葉）

⑩学生が書いたコメントに最頻出の語は「普通」であった。たとえば「ピノコがここまで学校にこだわっていたのは『普通』にあこがれていたからなのかな、と思いました。見ためは幼いけど、中身は19の女の子だし、（略）ピノコも女の子したかったんだろかな～と思います。」と書いた学生が

あった。また別の学生も「ピノコは恩師のために、勉強して力になりたかったということもあるかもしれないけど、ピノコが思う“普通”の生活を送りたかったのかなと思いました。人造人間であるからとはいえ、中身は19歳の女の子だし、私たちがこうして学校に来ているように、ピノコも“普通”の学校生活を羨ましがっているのかなと前回の話と繋がっていると思いました。」と書いており、ここでは前時に読んだあすなひろし作品のヒロインとピノコが重ねられている。「学校」とは、このエピソードにおいては高校のことである。受講生のほとんどがここでの生活を経験してきている。だから高校が話題となると皆が一様に饒舌になる。中には恨みごとも多い。そんなにいい場所でもないよとピノコに言ってあげたいようである。一般に思い描く高校のイメージは、かつては全日制か定時制であったのが、今は随分と多様化してきている。本学科でも年々通信制や単位制卒の入学が増えており、通学経験がほとんどない者や、中途退学をして高卒認定試験を経て入学してきた者もいる。学園ドラマのようないわゆる高校生活というものが、必ずしも共通体験ではなくなっているのである。今の時代であればピノコが通信制高校に行くストーリーもあり得たかもしれないが、ピノコが欲しているのは高卒資格よりも「高校生活」であることは、通った経験のない学校を「らーいちゅき」と言っていることから明らかである。ピノコはそれを手に入れたいがために、こっそり通信教育の「進学講座」なるものを受講し、修了証（公的には何の資格にもならない）を得る。無邪気に喜ぶシーンが痛ましく、我々を余計に悲しい気持ちにさせる。

さて、ここでようやくB. Jの話である。本作を本当の意味で象徴しているシーンは、幼稚園を“出禁”となったピノコに「くよくよすんな！／幼稚園や学校なんざゴマンとあるさ」とB. Jが声をかけた後に現れる。本作の最終コマだが、そこに描かれたのは今にも机に突っ伏しそうなうなだれる無言のB. Jの姿である。無粋を承知で学生に「この時のB. Jの胸の内は？」と尋ねてみた。ある学生が「(略) みんな『どうしよう…と悩んでいるように見えた』と言っていたが、私は『ピノコを救ってしまった』ことを後悔しているように見えた。理由はピノコがみんなのように普通の生活がおくれず毎日毎日傷ついている姿を沢山目にしたから。」と書いていたのを読んで胸が苦しくなった。ピノコは姉の体内に20年近く、ヒトとしての外形を持たない状態で閉じ込められていた存在である。言ってみれば混沌状態にあったわけだが、その彼女にいかにも人間らしい姿と目鼻耳口等の感覚器（すなわち秩序）を与えたのはB. Jである。今回のエピソードでもB. Jの手術によって彼女は命を救われており、ピノコはB. Jがいなければとうてい永らえ得ない存在なのである。そのピノコが世の中とうまく折り合えずに目の前で傷んでいる。「後悔」と書くとあまりに悲しいが、B. Jは「責任」を感じているのだ、とするのは間違っていない気がする。

ところで、B. Jとピノコの関係はどう説明したらいいだろう。疑似的な親子関係、疑似的な恋愛関係、疑似的な師弟関係、いずれにも「疑似的な」を付けざるを得ないところにピノコの悲しみがあるような気がする。二人の関係性に嘘はないが、では本物かというと考えてしまう。いや、これこそが本物の愛の形だ、と力強く言ってみたい気もするし、そもそも第三者が「本物」だ「偽物」だと断ずることに何の意味があるのだ、とも思う。最後にもう一つ学生のコメントを紹介したい。「(略) 最後の1コマを見て、とても切ない気持ちになりました。ピノコに学校へ行かせてあげたい

のに、行かせてあげられない気持ちを考えるとつらいですし、ピノコも高校に行きたくても見ただ目で門前払いされたり、幼稚園でもうまくいかなかったりして、かわいそうだなと感じました。でも2人がお互いがお互いのことを思い合っているところは素敵だなと思います。このような関係がずっとつづいてほしいなと思いました。」これを読んで私は、そうか、互いを思い合っていて素敵だな、それでいいではないか、という気持ちになったのである。

ピノコ誕生のエピソードから『莊子』の「渾沌」を想起した私は、この次の回で「渾沌」に取材した諸星大二郎『無面目』を扱った。数人の学生が「ハッスルピノコ」と関連付けたコメントを書いて提出してきた。なかなか興味深いものが集まったが、これについての考察は別の機会に譲る。

【C】藤子不二雄④『明日は日曜日そしてまた明後日も…』

⑦大学の国文科を卒業して社会人一日目の朝、父と共に家を出た坊一郎は満員電車内で揉みくちやにされ思わず「パパーッ！」と叫んでしまう。父に促され職場の最寄り駅にようやく降りた彼だったが、ビルの玄関で警備員に挙動不審を指摘されるとパニックに陥り逃げ出してしまう。結局出社できないまま日が暮れ、帰宅すると両親が初出勤を祝う席を用意していた。翌日以降も家は出るのが出社できない状態が続き、その後数十年にわたって自室に引きこもることになってしまった。

⑧親子は何を誤ったの？ どうすれば悲劇を回避できたの？

⑨「だめだー／もう会社へいけない!!」（パニック事件の後なんとか出勤しようとするも、職場で上司から強く叱責されている自分の姿を想像し再びパニックに陥った際の坊一郎の言葉）

⑩今の「8050問題」を予見しているとして近年異様なほど注目を集めている作品である。私自身は今から40年ほど前の小学校高学年の頃に初めて読んだ。主人公坊一郎に自分が重なり大きなショックを受けたことを覚えている。学生たちはこれをどう読んだのか。ある学生は「坊一郎くんの両親は守る場所が違ったんじゃないかと思う。やらす前から、子をかこって失敗させないようにしていたのが悪い方向へつながっていると感じました。それこそ親の善意なのかもしれない。（略）坊一郎くんはかわいそう。自分の考えも行動する力も身に付けず大人になり、ただ怒られることだけにおびえている。自分を信じる経験をしていない。」と書いて、親の困った“善意”が招いた結果だとする。多くの受講生からも同様の指摘があったが、このコメントの後半「坊一郎くんはかわいそう」以下の分析がなかなかの名文である。「自分を信じる経験」というフレーズは、時代を問わず年齢を問わず有効な言葉だと思う。別の学生は「（略）人は年をとるごとに色々な経験をしていく上で技術を身につけるから年をとるほど「知らない」「わからない」では済まされなくなってハードルがどんどん上がってしまうから、それがさらに坊一郎みたいな人を苦しめるし、いつまでも優しい両親と、そういう人はどんどん見離していく世間とのギャップが恐怖だと思う。（略）やはり、経験（コミュニケーション）が大切だと思う。」と書いていた。「経験（コミュニケーション）」という表現が面白い。誰かとコミュニケーションをとった経験、ということであろうか。経験とはコミュニケーションのことである、という言い換えだろうか。いずれにせよ坊一郎を苦しめているものは、親とのコミュニケーション、世間とのコミュニケーション、そして両者のギャップというこ

とだろう。もう一人紹介したい。少し長いが引用する。「現代において今の世代はよく人の目だったり周りが何を（自分に対して）思っているか想像してしまう傾向にあると思う。相手から聞いたというわけではないのにかつてに1人で病んでということが多い。私も人の目を特にきになってしまうので少し似ていると感じた。そんなとき私は友達に相談して話をきいてもらっていることが多いです。なのでこの物語を聞きながらなぜもっと周りのことを頼らないかと不思議に思った。両親に対して過保護だとかマイナスの意見が多かったし私もプレッシャーだと思ったけど、両親という強力な味方がいるのだし話したら何か変わったと思った。1人で悩むと自分のマイナスな意見しかでてこないからもっと頼るべきと感じた。また同時に他人の目よりも今、自分が何をすべきか何をしなければいいか考えるべきだ。」この学生の意見の他と違うところは、「なぜもっと周りのことを頼らないか」という視点である。傍目には何から何まで親がかりの坊一郎をこう評した学生は他にいなかった。一人目の学生のコメントにあったが「やらかす前から、子をかこって失敗させないようにしていた」両親のもとに育った彼は「やらかしてしまった」経験が不足しているから、いざそうなった時の対処法が分からないのだろう。困った時は自分だけで解決しようとしなくて適宜人に頼ろう、という発想すらないのかもしれない。「もっと頼るべき」と書いたこの学生の視点は他の学生の固定観念を崩すいい働きをした。このような優れたコメントを紹介した時、聞いている（見ている）学生たちが何か新しいものに気付いたような表情をするのが、授業者には大きな喜びである。

【D】永島慎二『仮面』

⑦朝、彼は歯を磨き、スーツに着替え、満員電車で揺られ出社する。会社では上司から長時間の説教を食らう。仕事帰り、彼は恋人と喫茶店デートを楽しむ。彼女を送った後、屋台の飲み屋で見知らぬ客と意気投合し、ようやく帰宅するとそのまま倒れ込むように寝てしまった。翌朝、鏡の前に立った彼がずっと被っていた仮面を取ると、そこには涙をにじませた一人の男の顔があった。この日会社を休んだ彼は仮面を捨てて海に行くが、捨てきれず、結局また被り直して家路につく。

⑧仮面をつけた自分は本当の自分とは言えないの？ あなたも仮面をつけている？

⑨「やっぱり……………だめだよ！」（被り続けていた仮面を取って海に投げ捨てた後、再びそれを拾い上げた際の主人公の言葉）

⑩授業で読んだ作品から一つを選んでコミュニケーションに関するレポートを書くよう課題を出した時、受講生の多くがこの『仮面』を採り上げた。その数は圧倒的であった。自分が被っている仮面はすでにもう自分の一部であり、捨てようにも捨てられないものだ、というシンプルなメッセージに共感するところが大きかったのであろう、ふりかえりシートの記述も自身の経験に照らしたコメントが多かった。たとえばある留学生は「(略) 日本で一人暮らしをしている私は、家族がなくて、生活ができるように毎日頑張っている。学校が終わってから、すぐにバイトへ行って、遅くまで働いている。疲れても、笑顔しないといけない。明日も、明後日も今日と同じかなと考えて、やめたいときもあった。国へ帰っちゃうかと思った。でも、やっぱり、ダメだ。」と書いた。主人公が送る単調な生活に自身の今を重ねた内容である。「明日も、明後日も」のくだりは前に読んだ

藤子不二雄^④作品のタイトルを活用したものだろうし、最後の「やっぱり、ダメだ。」は本作の主人公の台詞を拝借したものだろう。作品の主旨がしっかり捉えられているうえに引用も気が利いており、マンガが留学生の日本語学習にも有効であることを改めて思う。また別の学生は「(略) 私の初対面の印象を聞くと「明るくて友達が多そう。ワイワイしてそう。」と言われます。でも実際は根暗だし、多人数でワイワイするのも苦手だし、友達も両手で数えられるくらいしかいません。実際に初対面で自分を演じて、苦手な人から好かれてしまい、後々自分がきつくなっていくということがありました。でも偽りの自分を演じることは私は全く悪くないことだと思います。それを含めて自分だからです。」と書いていた。演じた自分を好かれてしまい、ずっとその「キャラ」を演じ続けるはめになったというエピソードはシュールなコントのようで、いたずらに笑えない怖さがある。やがて演じている自分と本来の自分との区別が自分自身でもつかなくなれば、全てひっくり返って自分である、と考えるより仕方がない。偽物の自分に本物の自分が取って代わられてしまうという怪異譚は世に多くあるが、それは取って代わられたのではなく、もともと両方が両方とも自分だったのだ、ということであろうか。このコメントのように、演じた自分、仮面をつけた自分も「自分」に他ならない、という趣旨のコメントは他にも多数見受けられた。これはこれで一つの答だが、観念的過ぎてやや物足りなく思っていたところに次のようなコメントを見つけた。「(略) 結局みんな、程度の大小はあるとしても他人と会う場では自分を演じるものなのだろう。現代はより顕著だと思う。辛い、辞めたい、でも辞められないのが理性であり、社会ではこの理性がないと成り立たない部分だってある。仮面を一瞬でもいいから海に投げ捨てる、その時間は時々あるべきだ。」最後の一文に救いを感じる。たとえ捨てた仮面を再び拾い上げ「やっぱり…………だめだよ！」と言うのがオチでも、一瞬でも捨ててみることで、それが時々できる環境が大事なのだ。それで我々はリフレッシュできるのだし、そうもしないと我々は“もたない”のだ。ということだろう。私たちは永遠に仮面を捨て去ることができない。でも、時々脱いでみるくらいは可能だ。そうしてバランスを調整して、また歩き出せばいい。いい提案ではないか。

永島慎二もあすなひろし同様、今の若者に知られているとは言い難い存在だが、今回『仮面』を授業で読んでみて、彼の他の作品も学生に紹介してみたいと思った。良い悪いは置くとして、コンテンツの洪水の中に暮らす令和の大学生は「おすすめ」に抵抗がないようであるから、同じ作品を異世代と共有し意見交換をするにはむしろいい時代だと思うのである。

第3章 「現代コミュニケーション論」の今後

(1) 「救い」としてのマンガ

トミヤマユキコ氏が近刊『10代の悩みに効くマンガ、あります!』(※6)の「はじめに」冒頭で「わたしは『マンガは人生の参考書である』と思っています。マンガ読者としても、マンガ研究者としてもそう思うのです。マンガはいいぞ、おもしろいだけじゃなく、わたしたちの人生を支えてくれるぞ。そうアピールし続けるのには、理由があります。しつこく言っていかないと、みんな

信じてくれないのです。」(p.iii)と書いている。マンガ研究者とは言えない私も同じ気持ちである。氏はまた、悩める若人にマンガを紹介する行為を「処方」と呼び、「すぐに効くものと、後から効くものがある」(p.v)と言う。これも同感である。私見を加えれば、「後から効くもの」の方が多いように思う。そしてまた、氏がここで告白していた「マンガに人生を救ってもらった過去」(p.vii)のエピソードも、状況から時代から作品からまるで違うが私にも似た経験があり、共感するところが多かった。

私も「現代コミュニケーション論」を通じた「処方」を、今後も長く「しつこく」続けていこうと思う。「社会に出ていちばん必要とされるのはコミュ力」「コミュ力のない人は就活もうまくいかない」といった「脅迫」をずっと聞かされて育った18歳の疲れは今や相当なものである。私はそんな疲弊しきった子羊たちに「はい、これ。タイパは悪いかもしれないけど。」と言って昭和マンガを手渡す。そして一緒に読む。読後には感想を共有し合う。本講座は学生による授業評価で昨年度前・後期、今年度前期の3期とも、ほぼ全ての質問項目で学科平均を上回っている。まだまだ改善の余地はあるが、手ごたえは感じている。

(2)マンガが「救い」となる瞬間

今の10代が抱えているトラブルの多くはネット絡みのものである。公立高校の教員であった20年余りを私は万年生徒指導担当として過ごしたが、近年はいわゆる「問題行動」にSNSが関係しているケースが多く、年々指導が難しくなっている実感があった。そして私は苦戦していた。我と彼とで見ている現実が異なるように思われたからである。彼の世界では既にリアル世界とサイバー世界の主従関係が逆転し始めている。とすると、今日の前にいる生徒は空蟬で、本体は実はスマートフォンの中なのは、という妄想をさえ抱くこともあった。『ミノタウロスの皿』の「言葉は通じるのに話を通じないという……これは奇妙な恐ろしさだった」という主人公のモノローグがリアリティを持って響いたのはこの時である。そして、その瞬間こそは「救い」であった。「今このピンチをすぐにどうこうはできないが、ただ、なんとなく状況は理解できた。」「こういうケースは、どうやら、あるところにはある話のようだ。」そう考えて理性が保たれたわけだから、この経験も私にとって紛れもない「マンガに人生を救ってもらった過去」の一つなのである。こうした「救い」の瞬間が令和の大学生にも訪れることを願わずにはいられない。

(3)教材化の芽

たとえば、スマートフォンの使用にまだ制限の多い高校という場（自由度は学校で差がある）では、生徒が日中、教員の目の前でそれを操作する風景を見ることは稀である。片や大学では学生の良識に任せてあまりうるさいことを言わない（なにしろ今や全員が成人なのである）から、授業中もスマホが手離せない学生がいる。それでも、人がそれを操作しているように見えているうちは安心だ。なぜならその「人」は、まだこちら側に生きている。「おい君、授業中なんだから大概にしろなさい。」と咎めて舌打ちされているうちは、事件はまだこちら側で起こっているのである。

ここでまた私は『ミノタウロスの皿』と同じ作者の別の怪異譚を思い出す。本物が「フェイク」にじわじわ乗っ取られていく恐怖を書いた『ドラえもん』の1エピソード（※7）である。この教材化に関してはまた別稿に譲るが、次なる教材はかくのごとくいつも芋づる式に頭に浮かんでくる。まるで自らの脳内に「あなたへのおススメ」機能があって、次はこのマンガのこの場面はどう？と案内してもらっているような感じである。こうして連想ゲーム的に教材化が進む場合もあれば、前述のトミヤマユキコ氏の著作や、「(1)」でもふれた永井均氏の著作（※8）など、マンガに学びを見出した文献の中から作品を拾って教材化を図ることもある。当座は本講座の主旨に従って、なるべく「昭和のマンガ」から良作を発掘していきたいと考えている。幸い近年は昭和期の名短編を多数収めたアンソロジーが各社で編まれており（※9）、アクセスしやすい状況である。

おわりに

二年がかりの報告になった。初年度で実践前夜を、次年度で実践当夜と今後の展望を、というビフォー・アフター型の構成を採ったためである。前夜の方は勝手知ったる「学習指導案」を書く要領で迷いなく運んだが、当夜の方は何をどこまで書いたものかで悩み、まずは『ミノタウロスの皿』一編でパイロット版の執筆を試みたところが、これだけで6,000字近くにまで達してしまった。他の8作品についても同じ調子で書いていったら、本稿は途方もない分量となってしまう。そこで当初考えていた形での実践報告は別の機会・媒体に譲り、取りあげる作品を絞ったうえ記述もダイジェスト風に改めることとした。結果このような内容に落ち着いたが、物足りなさはごまかすことができない。当初の構想の甘さを痛感しているところである。

本年度後期に私は新規科目「現代文化の中の日本語」を開設した。今年度は1年生のみが受講できる、小さなゼミのような講座である。先だってこの授業で嬉しい一幕があった。毎時一人の学生が自ら採集の“現代文化の中の日本語”についてプレゼンする時間を設けているが、そこである学生が「きのこ帝国」という若いバンドの詩世界について語る中で、永島慎二の『仮面』の一場面を引いたのである。この学生は前期「現代コミュニケーション論」の受講者の一人であった。およそ半年前の「昭和のマンガ」体験をこのような形でしっかり「経験」に換えた「令和の大学生」の粋と度量に私は大いに励まされた。このことを記して本稿の締めとしたい。

（※注）

1 テキストの出典は以下のとおり。

- ①藤子・F・不二雄『ビッグ作家 究極の短篇集 藤子・F・不二雄』（小学館、2013）pp. 3～38
- ②あすなひろし『青い空を、白い雲がかけてった 完全版 上』（ビームコミックス文庫、2008）pp.71～102
- ③頭木弘樹 編『絶望図書館』（ちくま文庫、2017）pp.319～342
- ④諸星大二郎『諸星大二郎 スペシャルセレクション 無面目』（潮出版社、2015）pp. 3～178

- ⑤ 藤子不二雄^④ 『ブラックユーモア傑作選 マグリッドの石』(中央公論新社、2014)
pp.311～334
- ⑥ ササキバラ・ゴウ 編『現代マンガ選集 日常の淵』(ちくま文庫、2020) pp.99～117
- ⑦ つげ義春 『つげ義春コレクション 李さん一家／海辺の叙景』(ちくま文庫、2008)
pp.233～250
- ⑧ 山田英生 編『老境まんが』(ちくま文庫、2019) pp.281～298
- ⑨ 辰巳ヨシヒロ 『T A T S U M I』(青林工藝舎、2011) pp.113～143
- 2 初出の時点では合作時のペンネーム「藤子不二雄」であった。
- 3 2に同じ。
- 4 この非常に整理の行き届いた印象的な台詞は、実は1969年の初出時には見られなかったもので、1977年の単行本化の際に新たに書き加えられたものである。先ごろ発行された『藤子・F・不二雄 SF短編コンプリート・ワークス Ultimate Edition 1』(小学館、2023)で初出時のバージョンが確認できるが、現行のものと比べてページ数が大幅に少ない(実に13ページも)ためか展開が性急で余裕がなく、そのため内容的にもやや幼い印象の残る作品となっている。作者がまだ青年誌に描きなれていなかったこともあるのかもしれない。
- 5 あすなひろし 『いつも春のよう』(ビームコミックス、2004)の巻末解説で筆者みなもと太郎があすなひろし評の白眉として糸井重里の次のような発言を紹介している。「ああ、あの人の作品って不思議なものがあるよね、なにか『真っ昼間の悲しさ』みたいなさ」
- 6 トミヤマユキコ 『10代の悩みに効くマンガ、あります!』(岩波ジュニア新書、2023)
- 7 藤子・F・不二雄 『ドラえもん』第1巻(小学館てんとう虫コミックス、1974)所収「かげがり」
- 8 永井均 『マンガは哲学する』(講談社、2000)のち講談社+α文庫(2004)、岩波現代文庫(2009)
- 9 代表的なものとして以下の二つを挙げておきたい。
 - ・松田哲夫 編『家族で楽しむ「まんが発見!」』全9巻(あすなろ書房、2020～2021)
 - ・中条省平ほか 編『現代マンガ選集』全8巻(ちくま文庫、2020)

